褐色の中僕ら

柊葉一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
褐色の中僕ら

【Ｎコード】
Ｎ５５４１Ｄ

【作者名】
柊葉一

【あらすじ】
なんだかバーの雰囲気が書きたくて。グダグダカップルの成立をお楽しみください。

「本当……、恥ずかしい人だわ。」だなんて、あの中年女性は思っているのかもしれない。
通いのバーは、いつもならこんな閉店間際の遅い時間にはあまりお客は来ないのだが、今日は特別なのか、いつまでたっても客の重たい腰は上がらないようだった。
薄暗いカウンターの一番奥に座っているのが僕。隣には最近よくこの店で見るようになった、いまいち幼さが抜け切れていない青年。まだ二十歳前後だろうと、僕は踏んでいる。一つ席を空けてその隣には中年の夫婦が座っていて、窓際に一つだけある二人掛けのテーブルにも、若くも老けてもいないカップルが長い時間そこにいる。先ほどから話が弾んでいるようには見えないので、もしかしたら別れ話でも持ち上がっているのかもしれない、と勝手な邪推をしていた。
時刻は午前1時を回る。
普段はおそらくバーになんて来ないのだろう雰囲気を醸し出している中年夫婦は、今日は夫が55歳の誕生日だったのだという。日付が変わっているので、厳密に言えば昨日だ。
なぜ僕がそんな事情を知っているのかというと、さっきからその旦那が大声で、僕の隣にいる青年に詳細よろしくそのことを説明したからだった。青年は何ともはっきりとしない、曖昧な態度でその旦那の話に相槌を打ちながらその話を聞いている。旦那の呂律が回らなくなってきているので聞き取るのに必死そうだ。自分の話を理解してもらえないと、旦那は不機嫌を露わに、さらに声を荒げたりするのである。そのあとでマスターに優しくなだめられて笑顔に戻るところ、まったく酔っ払いの極みだ。
ただその隣にいる嫁は、口を挟まず、時折タイミングを計っては青年やマスターに申し訳なさそうな遠慮がちな笑みを見せた。そし

て旦那が話始めるとまた、誰からも視線をそらして、自分のテリトリーに浸っているようだった。もう呆れて何も言う気にならないわ、という心の声が、彼女の横顔から伝わっていた。

ウィスキーの入ったグラスを傾ける。僕は少しイライラしていた。バーで飲む時は、雰囲気に酔うように静かに飲む、これは誰だって空気を察すればおのずとそのような態度をとれるものだ。しかし悲しいかな酔っ払いの麻痺世界。彼の大声はさっきから僕の神経をあからさまに気持ち悪く撫でてゆく。

「さいきんのぉ……、教いくってやつはぁ……クズだろぉが。親が、いかん。先生どもも、頭の悪いやつらばかりが集まったとこで、なぁにができるもんかねぇ……できゃしねぇだろぉよ……。おれぁ、ぜっっっ……ったい！……な？おれがぁ教師になっとったら、そりゃあもう世の中こんなふうにくるったりせんかったよ、……ほんとうに……」

どういう経緯でそんな話題になったのかは今や不明だ。そして僕のイライラは収まらない。しかし、彼によって気分を害されるのも癪なので、僕は彼の嫁と同様にもう諦めて、純粋にお酒を楽しむことにした。聞かざるだ、と自分に言い聞かせて、マスターに空いたグラスをを示す。

酔っ払いの話を聞いていたマスターはそれに気づくと、苦笑いを浮かべながら僕の前に歩いてきた。

「ごめんねぇ、ちょっと今日は賑やかすぎるねぇ……。」グラスを下げてくれながら言う。

「いいよ、あんなでもお客でしょ」

「ははっ、言うねぇ。ま、私からしたら確かにそうだけどさ。……さて、何にする？」

「ええと……ウィスキー。ロックで。」

「また？好きだねぇ……」

ひやかすように笑いながらマスターは後ろの棚からボトルとグラスを選んだ。

マスターは二十代後半の、シュッとした線の細い美人だ。スタイルの良さが、白いシャツと黒のスタイリッシュなパンツというシンプルないでたちから窺える。マスターを目当てに、このバーへ通う男も多いらしい。

ちなみに僕はといえば、この店がオープンしたころからの常連で、もう通い続けて5年目になる。互いの人となりは、それなりに把握しているつもりだ。

「はい、ウィスキーロック、お待たせ。」音も立てずに、グラスを置く。

「マスター……今日黒でしょ？」僕はおもむろに言う。

「へ、何が？」

「下着」

僕の言葉を聞いて、マスターは自分の胸元に視線を落とした。

「ああ、透けてた？」

事も無げにこちらへ視線をよこした。僕はグラスに口をつけながら頷く。

「そういえばキャミソール着るの忘れてたわ」

恥じらうわけでもなく、むしろ、失礼しましたぁ、なんて言葉を返すものだから、並の男じゃたじたじだ。僕にしろ、相手がこの人じゃなければ、あんなデリカシーのない不躾なこと、言うはずがない。なんにしろこんなふうに、気を遣わなくても許される場所だから、僕はマスターといるこの空間が心地いいのだ。

「なんか、お二人仲よしですよね」

急に、隣の青年が割って入ってきた。いつの間に開放されたのだろうかとあちらの席に目を向けると、もうそこに酔っ払いの姿はなく、嫁が一人、いそいそと帰り支度をしていた。

マスターがそれに気付いて、清算に行く。

「君、大変そうだったね」僕は青年にねぎらいの言葉をかけた。

「ああいうときってどう反応すればいいのか、いまいち分からなくて……何言ってるか分からないし」苦笑いしながら青年は答える。

絵に描いたような好青年、という印象を受けた。
その時、トイレのドアが開いて、酔っ払いの旦那が出てきた。僕らは同時に、カウンターの中へと視線をそらす。青年がまた絡まれるかと少しどきどきしたが、旦那は僕らの後ろをふらふらしながら素通りして行った。そして嫁に、出るぞ、と声をかけるとそのまま店から出て行ってしまった。
それを見送りながら、ふー、と健やかに溜息をつくと、嫁は財布を取り出しながらマスターに笑いかけた。
「五月蠅くして、本当ごめんなさいね。あなたたちも……」
僕らの方へと視線を寄越して言った。僕はそれに笑顔で応え、青年もいえいえ、と首を振った。
「また、ぜひいらしてくださいね」と、マスターが笑顔で言う。社交辞令ではなかった。
嫁はそうね、と笑いながら一度こちらに視線を向けたかと思うと、おもむろにマスターの顔近く寄って、何かを囁いた。二人の距離が離れたあと、マスターはめずらしくキョトン、とした顔をしていた。
「ふふ、もっと若い時に来たかったわ、こういうお店。」
そう言って笑った嫁の表情は、彼女の若かりし頃を想起させた。きっと、さぞ綺麗だったのだろうと、僕は思った。
帰って行った夫婦につられたのか、窓際に座っていたカップルもそのあとすぐ帰って行った。帰り際、二人が腕を組んでいるのが見えたので、どうにか、別れの危機は逃れたようだ。
マスターと、青年と、僕と3人で話をする。店内が急に寂しく思えた。
時刻はもうすぐ2時を回る。
マスターが窓のブラインドを下ろし始めたので、僕はいつものようにシャッタを半分だけ下げるため、外に出た。ここの常連になってラストまで残るようになってから、今はほとんど僕の仕事になりつつある。そういえば初めて下げるように頼まれた時は、何か嬉しかったな、とどうしてだかそんなことを思い出した。

店内へ戻ろうとしたとき、青年が中から出てきた。
「お、帰る？」
「はい。実は明日1限からなんですよね……。」青年は苦笑いしながら頭を掻く。
「学生は大変だなぁ……寝過ごさないようにね。」僕がそう言って笑うと、「あなただって院生でしょ。」と、悔しそうにしながらも笑った。
「一応ね。そんじゃ、お疲れさん。気をつけてね。」
僕は軽く手をかざして、自転車にまたがる彼を見送ろうとした。
「はい、お疲れさまでした。」彼は元気にそう言った。そして行きかけたところで「あ」と思い付いたように止まって振り向く。そして。
「お二人の時間、邪魔しちゃってすいませんでしたぁ！それじゃ！！」
そんな一言を残して、颯爽と彼の自転車が遠ざかっていった。

なにやらいろいろと誤解を受けているらしいと、納得いかない思いで店内に戻る。マスターが店の明かりを上げていたので、少し眩しかった。
「時間かかったね。どうかした？」マスターは自分にもウィスキーを作っていた。
「うん、……なんか彼、ちょっと酔ってたみたい。あ、オレももう一杯、同じの。」
「よし、アフターだからおごってあげよう。」
カウンターにそのまま置いていた僕のグラスに、マスターはウィスキーを注ぎ足した。
「……そういやねぇ」ボトルを棚に片しながらマスターが切り出した。
「うん？」
「お客さんいたじゃない、中年の夫婦で」

「うん、いたね。うるさかったおじさん。それが？」僕はウィスキーをすする。
「奥さんに言われたんだよね」
やけに言葉をきるな、と思う。マスターにしてはめずらしい気がした。
「なんて？」
「『奥の彼と、とってもお似合いね。羨ましいわ』……だって。」
僕の反応を見るように、マスターは逸らしていた視線をチラリとこちらへ向けた。
それは、さっき青年が僕に残して行った言葉と、言わば同意語か？いたずらっぽく笑っていた青年の顔を思い出す。お似合い？僕らが？周りからはそう見えるのか。そして、そんな事を言われた僕らは今、明らかに動揺している。笑い飛ばそうと思えばいくらでもできたのに、僕は完全に、そしてマスターも、そのタイミングを失っていた。
しかし、笑い飛ばす必要はあったのか？
急にそんな疑問が浮かぶ。笑い飛ばす、ということは、彼らからの言葉を否定する、ということだ。いや、しかし、今はそれよりも、何か言わなければ。でも何かって何をだ？
僕の頭は数々の言葉を処理しきれずほとんどエラーしていた。そんな中。
「すごい顔してる……」
少し気まずそうな顔をしながらも、マスターが先に口を開いた。そして二の句を継ごうとして、笑おうとした。笑うだと？
「待って、笑わないで！」
冷静さを失った人間は、こんな言葉しか言えないものだ。
マスターのびっくりした顔など、ここしばらく見ていなかった。それが今、僕の妙な言葉のせいで目の前に作られている。そしてその顔は、僕が何か言うのを待っていた。
「あ、ごめん。……えーと、じゃあ、どうする？」

自分で言っていて意味が分からなかった。
マスターは意味を計りかねながらも、僕の言葉にこう返す。
「どうするって……どうする……？」
二人揃ってお手上げだ。
とりあえず、二人でウィスキーを飲んだ。
「……どうしよっか。」
そんなことも決められない、仕様のない僕らだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5541d/

褐色の中僕ら

2010年12月18日23時34分発行